

人と車の「新しい」関係について

服部 秀雄 日本交通医学工学研究会 理事

本研究会は平成4年6月の発足時から、交通災害の原因としての人的条件（疲労、居眠り、高齢、疾病、飲酒、交通マナー）を主として医学の面から、環境条件（車、道路など）を主として工学の面から検討し、人と車が有機的に一体化して相互補完的にコントロールされるようなシステム作りの達成を目指して活動を推進してきている。

この10年間、交通死亡事故は着実に減少してきている。しかし、交通事故統計によれば、「第1当事者の方例違反別死亡事故発生件数（平成12年）を見ると、最高速度違反、脇見運転、漫然運転、運転操作不適等の占める件数が全体の47%になっている。このことは、人と車の「人的条件」及び「環境条件」のミスマッチが根底に有ると考えられる。

そこで、ここ10年間の人と車の関係を、

自動車の利用の仕方、高速道路総延長の拡大、道路付帯施設の充実、自動車技術の進歩（安全性の向上、高品質、新しいタイプの車両）、運転者（免許保持者の変化）、

道路交通法規（改正道交法、チャイルドシート義務化）などの変化について概観し、これまでと比較して、「何が新しく」なったかを明らかにする。この10年の変化の中で特に大きな変化は、自動車の中への外部情報の取り込みであろう。

電話、携帯、ナビなどの装置が導入されることによって、運転者が行うことも飛躍的に増加してきている。

しかし、人の情報処理能力、運転能力、判断力などには、おのづと限界があり、この面での人の進化は遅い。人は、まだまだ、これらの新しい道具を充分使いこなすところまでに至っていないようだ。そこからミスマッチが発生し、それが事故、死亡事故につながっているのではなだろうか。人と車を取巻く多様な変化の中で、交通事故低減に向けた「人と車の新しい関係」を探り「人を知る、車を知る」ことによって、「人が足りない部分を車がどのように補うか、車が足りない部分を人がどうに補うか」という視点から、「人と車の新しい関係」を築き、実効ある交通安全対策を探りたい。